Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2015年10月25日

献学60周年記念事業

ホームカミング：対話（ダイアログ）としての演劇

ICU

60th Year

献学60周年記念事業

国際基督教大学

対話としての演劇
Drama as Dialogue

2年前から始まった献学60周年記念事業であるホームカミング。今回のテーマは「Drama as Dialogue　対話としての演劇」。ドラマ、オーケストラなどの言葉が古代ギリシャ演劇にその起源があるように、古今東西を問わず演劇は生活に溶け込んでいます。演劇が人間の生活にいかに密接に関わっているかを探るために「対話」に着目、模擬講義とパネルディスカッションを行いました。

コーディネーター
佐野 好則 教授｜西洋古典学

講義1
役者と観客の対話～歌舞伎の『口上』と『ほめことば』
矢内 賢二 准教授｜日本文学

矢内　歌舞伎では、虚構の世界である舞台にいる役者と現実の世界である客席にいる観客との間で言葉を投げ掛け合うことが起こります。
　役者から観客に呼び掛けるものは、役者が本人としてあいさつをする「口上」です。現在は演目の一つに「口上」が入れられていることが多いようです。上演中に芝居が突然中断され、いきなり「口上」が始まるケースもあります。
　芝居の上演中には、本名と芸名がある役者に劇中での役名がつくという「三段かさねの虚構」が

存在しています。そして「口上」のときには役名から芸名に戻り、「口上」が終われば再び芸名から役名に戻ります。近代的な演劇では「100％役になりきる」のが基本的な考え方ですが、歌舞伎では「本名・芸名・役名」が透けて見える「半透明の薄いベール」を重ねている状態であると言えるでしょう。

一方、観客から役者に呼びかけるものとして、現代も行われている「かけ声」の他に「ほめ言葉」という慣習がありました。これは芝居の途中に観客の代表が舞台の花道に上がり、役者をほめるというもの。この「ほめ言葉」は七五調で「ものづくし」などの趣向を凝らした美文で綴られられます。そうなると素人ではできないので、プロのスタッフが考え、役者が観客の代わりに述べるようになりました。さらにほめ言葉を掲載した冊子も出版されるようになります。そこには「いつ『ほめ言葉』を述べるか」も記載されており、それを見た観客は「せっかくなら『ほめ言葉』がある日の芝居を観にいこう」と思うようになります。明治5年に村山座で行われた「国性爺姿写真鏡」という芝居では、三代目沢村田之助という役者に対して7人の浅草の芸者が「ほめ言葉」を述べましたが、その様子が錦絵に描かれているほどで、「芝居のもう一つの楽しみ」になっていた様子がうかがえます。　なお、明治29年の「助六由縁江戸桜」（歌舞伎座）を最後に、「ほめ言葉」が行われたという記録は残っていません。明治末期から大正にかけて「舞台と客席を明確に分ける」「上演時間が役者の都合に左右されるのではなく、事前に発表された時間通りに上演される」など、歌舞伎の世界にも西洋演劇の影響が及んできました。観客と役者が虚構の世界を行き来するという歌舞伎の特徴も、次第に近代演劇と同じようになっていったと言えるでしょう。

講義2

演劇制作における学生の対話

クリストファー・サイモンズ 上級准教授｜英文学

佐野 サイモンズ先生は学会発表のため、この模擬講義に参加できませんが、ビデオによるメッセージと、学生たちが制作したフィルムを提供してくださいました。サイモンズ先生の授業では学生が戯曲を歴史的・文学的に分析・検討するとともに、自分たちで戯曲を演じ、それをビデオクリップに撮影することを行っています。

最初に見ていただいた2本の作品はシェークスピアの「リア王」。リア王が退位に伴い領土を3人の娘に分割して与えようとした際に、上の娘は言葉巧みに父親を喜ばせたのに対し、末娘のコーディリアは率直に意見を述べて父親を怒らせるというシーンです。1本目は居酒屋でこのシーンを撮っているようですね。2本目のグループは、オープニングに長女・次女に裏切られてさまよう王の姿を冒頭に持ってきて、その後にタイトルロールを入れて、リア王と3人の娘との話し合いのシーンを入れるという演出にしています。このように各グループが工夫をして制作していることがわかります。

その次に見ていただいたのは20世紀のイギリスの作家、マイケル・フレインの「コペンハーゲン」。史実に基づいた作品です。ドイツの物理学者ハイゼンベルクは、師であり、親同然に思っていたボーアと原爆開発を巡って敵国人になってしまいました。この作品では、1941年、ナチス占

領下のコペンハーゲンで、ハイゼルベルクがボーア夫妻を訪ね、どのような話をしたのかがテーマになっています。この二人の間では何が語られたのかをICUの学生がどのように表現するかが大きなポイントになっています。

このように学生たちが作品を作るという作業の中で、どのような演出にするか、作品をどう解釈するかなどの「対話」が行われています。演劇をつくる過程を授業に取り入れているサイモンズ先生の授業の一端をみなさんに紹介させていただきました。

講義2

対話としての演劇－フランス語戯曲の翻訳を通じて－

岩切 正一郎 教授｜フランス文学文学

岩切 演劇の基本は「対話」であると思われがちですが、「一人語り（モノローグ）」「対話（ダイアローグ）」があり、「対話」のようでありながら、その場では応答のない神のような相手へ語っているものもあります。私が翻訳したフララランス語戯曲を通して、これらを見ていきましょう。

まずルーマニア出身の作家、ウジェーヌ・イヨネスコの『犀』。これは主人公以外の全ての人間が犀に変身する物語で、ファシズムへの寓意作品です。お見せする演出では、イヨネスコの他の散文作品から文章を引用し、冒頭に元々はないモノローグをいれています。これは哲学的なメッセージを観客へ投げかける演出家の意図によるものです。

次に対話の例としてあげるのはアルベール・カミュの『カリギュラ』です。暴君カリギュラのモノローグの後、貴族ケレアが登場して対話するシーンです。対話といえば「異なる意見の人が話し合いをしながら一致点を見出す」のが普通ですが、ここではdia-logue、ふたつの論理の戦いを通して「他者にとってのカリギュラ像」をカリギュラ自身が認識していく作業、そしてケレアのモラルを明確にしながら、両者が決定的な対立を意識化する作業になっています。

最後に紹介するのがジャン・アヌイの『ひばり』。独房に入れられたジャンヌ・ダルクが一人語りを行い、そこに貴族ウォーリックが登場して彼女と対話、その後にモノローグに近い形で大天使や神へ語りかける、というものです。大天使や神と対話をしたところで、返事は返ってきません。しかし、ジャンヌはその対話を通して「生きるべき自分の姿」を見出していくのです。この「対話」も一般的な「議論を通して互いの一致点を見出す」ものとは異なるものですが、演劇における「対話」の一つの形であると言えるでしょう。

パネルディスカッション

言葉に依らない「対話」の表現方法とは

質問1 今回は演劇における「対話」がテーマでしたが、そもそも日本人には今「対話力」が低下していると思います。先生方はその点についてどう思われますか？

岩切 対話を行うときには、「自分は他者をどう思うのか」「他者から自分はどう思われているの

か」を考える必要があるのですが、現代では「自分が話すロジックしかない」場合が多いのではないでしょうか。「自分とはロジックが違う相手の話を聞く能力」が下がっていると感じることはありますね。

矢内 対話が何からできているかを考えると、それはやはり「言葉」です。「対話力」の低下には、言葉を使うときの足腰の弱さも影響しているでしょう。そこで私は学生のみなさんにはよく「古いものを読んでください」と言っています。

佐野 それには心から大賛成ですね。昔から面白いと思われ、今も読み継がれているものにはそれだけの価値があります。「相手との違い」を認識するとともに、言葉の力も身に付けてほしいですね。

質問2 対話とは「言葉を発するもの」だと思いますが、クラシックバレエやパントマイムのように、言葉に依らない「対話」が成立する表現方法について教えてください。

佐野 「科白が身体の中に入る」という表現があるように、練習を重ねて単なる言葉だった科白が演者の肉体と結合したときに、身体の動きも含め「対話」の表現方法になっていると考えられます。

矢内 さらに言えば「言葉にならないから身体で表現する」ということもあるでしょう。例えば悲しみをこらえる様子を身体全体で表現するなど、動作や言葉を抑えて役柄の心理や感情を表現する演技は、歌舞伎などにおいて「肚芸」と呼ばれています。明治以降、歌舞伎でも肚芸が重視されるようになりました。

岩切 間やト書きなども「言葉に依らない」対話の表現方法の一つかもしれません。伝統的に決まっている動きもありますが、身体表現については原作に書かれていないことが多く、役者や演出家が話し合って決まっていきます。どういう仕草をすれば作品のメッセージを伝えられるか。その点からも動きは必要だと思います。

佐野 まだ話し足りないとは思いますが、時間になりました。パネルディスカッションは終わらせていただき、引き続きみなさんで「対話」をしていただければと思います。今日はありがとうございました。